

たかが数学，されど数学

植村信子（和歌山県・主婦）

今からもはや、十年前のことになる。

「オカン、はいっ。思う存分勉強しよし！」

中一になった娘が授業の無い日に数学の教科書、ノート、プリントをおいて行ってくれる。

家事が一段落したところで教科書をひろげてみる。

『文字の式』だ。そこに書かれていることの意味が理解できる。練習問題が難なく解ける。

嬉しい、本当に嬉しい。

大げさなんかじゃない！ 喜びが自信となり力となって細胞から若返るような気分だ。

あの頃に戻れたら...、そう、今の私の娘の時代に戻れたら...。自分の人生は変わっていただろうか？それは果たして幸せに満ちたものだっただろうか？

突拍子も無い想像に自嘲の笑いがこみ上げてくる。

私は実に数学の苦手な生徒だった。かといって、決して怠け者だったという覚えも無い。むしろ学ぶことに関してはコツコツと努力を惜しまない方だったと思っているくらいだ。

しかしこと数学に関してはどういう訳か教科書を開いてもまず、書かれていることが理解出来ない。と、いうか、殆ど意味不明に近い状態だった。

当然、授業は聞いてはいても何のことやらさっぱりわからず、後はただぼんやり他のことを考えているか、いねむりなどしてひたすら終業のチャイムが鳴るのを待っていた。

教師からこのような授業態度を名指しで注意をうけたこともある。見るのもおぞましい点数を右肩に頂いた答案用紙を持ち帰らずに教室の机の奥に突っ込んでおいたものを、こともあろうかちょっと憧れていた男子に見られたことも...。せっかく頑張った中間、期末テストも数学が台無しにしてくれる。数学に関しては苦い思い出ばかりが残っている。

戦後、ベビーブームも最中の申し子、いわゆる最後の団塊の世代だ。

一学年 16 クラス、一クラス 53 名編制はざらだった。

教師にも生徒の誰がどのような遅れを取っているのかなど一人ひとりを具体的に把握する余裕はほとんどなかっただろう。

それでも二者面談などでは極端に数学の成績が振るわないことが話題となった。

「数学、苦手だから...」

「だからこそしっかり勉強せなあかんやないの」

「.....?」

私にとってはこの極めて具体性にかける担任の指導に、「何をどう勉強しろと言うのだ?勉強しようにも何が何だかさっぱり分からんと言うのに...」そう突っ込みたかったがその頃の私には恥ずかしくてとても言葉にすることなどできなかった。

結果、自分の能力を巷間言われるところの文系、理数系の分類方法でふるいにかけ、つまり、そういう思考には向いていない脳なのだろうと自らを納得させた。

それにしても、数学の不出来は私からあらゆる自信を奪い取り、中学三年間ですっかり消極的な人間に変貌させたといってもいいぐらいだった。

当時、高校への進学率は年々上昇の一途をたどっているときでもありクラスメートの殆どが進学を希望していた。

そんな中、私は早々と進学はせず家業のクリーニング屋を継ぐと進路を明確にしていた。勿論家庭の事情と言うこともあったのだが、そう決意させた一番の要因は「どうせ数学もわからへんし...」だったように思う。

大した学業も修められないようなら進学しても意味がないように思われたのだ。

それでも時世と言うものを考慮してか親からは「高校へ行きたいんやったら行ってもええんやで...」と、一応、消極的なアプローチもあったのだが、当時の私はこの提案にも大した魅力は感じなかった。

それに家のほうでもおおむね私があっさり「家業を手伝う」と宣言したことにホッと胸をなでおろしていたことだと思う。

まわりに勉学の大切さや夢や理想を語るような人もいなかった。十五歳の小さな頭で考えて出した結論だった。

ただし、表向きはあくまでも『「家庭の事情」で進学を諦める』と言うことになっていたのでそんな私を気遣ってか、恩師の一人は教室の片隅にワザワザ私を呼び止めて

「人間どこでも勉強しようと思ったらできるもんや。中学時代の勉強さえきちんと身に付けといたら社会に出ても恥をかくことはない」と、言ってくれた。

べつだん『熱っぽく語る』といった風でもなかったのだが、静かなエールが胸に沁みた。

高校進学は諦めたとは言うものの、まだ若かったし学ぶということへの旺盛な意欲は決して失せてはいなかった。

結局、この箴言に忖えて私は成人するまで中学時代の教科書を手放すことは無かった。

確かにおかげで、社会に出ても大した恥をかくこともなかったのだが、なぜか成人してまでも『数学ができない』コンプレックスから開放されることは無かった。

日常生活の中で数学的思考が必要とされるのは客に渡す釣銭の計算ぐらいだ。簡単なその場面でさえ私は妙に緊張する始末だった。

漢字や語彙、歴史や社会の仕組みを私よりよく知る人は多くいた。教えを乞うて知識を増やすこともできた。しかし、因数分解や関数をグラフに表すことの出来る人にお目にかかることは無かった。

「所詮、数学なんてこんなもんや、何んの役にもたたん」そう思うことで『数学ができない悔しさ』から逃げようとしたが、どうしたわけかどうにもこの数学にこだわりを捨てきれないでいた。

何故数学ができなかったのか不思議でならなかったのだ。

本当に文系、理数系などと能力をスパッと分けられるものなのか？いくら頑張っても私には数学は理解出来ないのか？小学生の算数ならいったい何処まで理解できるのか...？ずっと疑問だった。

ところが人生と言うものは意外な展開に満ちているものだ。これだから生きるって楽しい！この不思議を解明するチャンスがめぐってきたのだ。

きっかけは三十もとうに過ぎてから縁あって成就した結婚がもたらした、愛しき子供達だ。

無事、就学年齢に達しぴかぴかの一年生になった日、子供が持ち帰った教科書に名前を書き入れながら思った。

「そうだ！この子についていこう。算数、初めからやり直したらええんや！」

それにしても何と素敵な教科書達だろう。どのページにも愛らしいイラストや美しいカラーの写真が満載だ。いやでも学ぶことへの意欲がそそられる。今の子供達を取り巻く豊かさは羨ましいかぎりだ。

その晩、はしゃぐ子供の横でそれ以上に幸せだったのは私ではなかったかと思う。

かくて我が家の子供達は勉強をキッチンのテーブルですることになる。

「集中力が無くなる」と、こういった場所で勉強をすることに異論を唱える人もいると思うが、私はあまり気にしなかった。

子供達も知りたがり屋のオカンがすぐ頭を突っ込んでくるので面白がって今日習ったと

ころを得意になって教えてくれた。

幾らなんでも加減乗除程度は無事クリア。小数の計算も大丈夫だ。分数の計算だって...約分もできるし、通分もできる。したがって足し算もできるし引き算もできる。掛け算も大丈夫。割り算は...?

「ひっくり返して掛ける...?何それ??」

ただやり方を忘れていただけだと思っていた分数の割り算。頭の中の何処を探してもおそらくシナプスのかけらさえも見つけることができなかつただろう。

どうしてこんなことになっているのだろう...?思い当たることが一つだけある。

小学生の頃、腸炎を患ったことがある。しかも手当てが遅れたこともあって大変重篤な状態になった。当然回復にも時間がかかり登校できるようになるまで一ヵ月はかかったと思う。その時期はもうはっきりとは覚えてはいないのだが、まだ父が存命中だったという記憶から多分、四年生か五年生の頃だったと思われる。

勉強の遅れを取り戻すためになんらかの手立てが講じられたという記憶も無い。もし算数に空白の期間があるとすればこの時かもしれない。

子供達と一緒に勉強をするようになって分かったことだが、他の教科は例え解らないところを作ってもそれなりに形になっていく。後で解らないところに戻って埋め合わせればそれで良い。ジグソーパズルの抜けているピースみたいなものだ。それとは違って算数は一つ躓くと次から次に解らないところが増えていく。

「あー、かわいそうな私...」

おそらく分数の割り算を落としたことで急速に算数への興味も失せていったことだろう。中学に入学した時点ですでに数学が理解不能だった。

子供達の協力を得て無事、小学校の算数を修得すると、いよいよ私のトラウマとも言える中学の数学に再挑戦だ。もう何も怖くは無い、かかってきなさい!

遠い昔、食塩水の濃度や、距離、時間、速さの関連といったお馴染みの連立方程式の応用問題に頭を抱え込んでいたことを今でもちゃんと覚えていた。

自分の力で見事に連立方程式が立てられた瞬間、私は子供達に飛びついてキスして回ったぐらいだ。

『数学がわかる』と言うことがこんなにも私に喜びをもたらしてくれるものなのかと、今更ながらに中学時代一人で悪戦苦闘していた自分が痛ましい。いや、何故、数学がわからなかったのか『ルーツ』をついに探り当てた今となっては何だか滑稽な思い出だ。

子供に与えられた中学三年間の計十五回に及ぶ中間、期末テストの問題には毎回ワクワクする思いで挑戦してみた。これらを満足のいく成績でこなし終えて、ついに私は積年の『数学の呪縛』から解放された。

まさに、恩師の言葉どおり「人間どこでも学べるもの」だ。

最近、子供達の学力低下が問題視され、またまた教育界に激震が走っている。

『詰め込み教育』の非を正すために設けられたはずの『ゆとり教育』が今度は血祭りだ。

こんな、何のビジョンも無い行き当たりばったりの大人たちに翻弄される子供達がいい迷惑と言うものだろう。

私は思う。ほんの一握りの日本の子供達の学力がなぜ、世界のトップレベルでなければならないのだろうか？日本の子供達の学力がなぜアジアの頂点に君臨していなければこの国の大人たちはあわてふためくのだろうか？

「このままでは日本の将来は暗い。なんとでも日本民族の優秀さを…」と、戦前ばりの陳腐なナショナリズムで子供達を振り回すのはもうやめにしたい。

出来る子供を選別して学力向上に血眼になるより、わからない子供を作らないことに全力が注がれるべきだ。

学ぶ喜びを知る子供達を育てることこそが日本の輝く未来を約束してくれる。

美しい教科書や少人数のクラス編制、明るい教室、愛らしい文具の数々にいたるまで、私達の時代とは大違いの豊かな教育環境を与えられていながら、今の子供達に瑞々しく、しかもワイルドな覇気をあまり感じる事ができないのは私だけなのだろうか？

子供達の一人残らず、一人ひとりが光り輝くダイヤの原石だ。親も教師も丹念に、慈しみをこめて磨き上げることだ。

一人として置いてきぼりを食らうことや、さげすみを受けるようなことがあってはならない。

自分の価値を知り、自信に溢れた子供達が続々と輩出される日々の到来こそが真にこの国に待ち望まれる。

数学は『わかる喜び』と言うものがダイレクトに自分自身に伝わってきて、わかると実に痛快な学問だといえるだろう。それにわかると間違いなくカッコイイ…。

きっと子供達も「自分ってスゴイ！」と思えることだろう。

数学は子供達に『学ぶ喜び』を伝えるにはもってこいの教科だと思われる。自身の体験からもそういえる。

既に子供達が社会人となった今でも私は毎年、春になると県立高校の受験の問題に挑戦する。

受験日当日の夕方の地方紙に問題と答えが掲載されたものを取っておくのだ。

今では、得意だった国語や社会よりも数学の方がわかりよい。答えは一つ。はっきりしていて解りやすい教科でもある。

しかしまた、散々苦労させられたわりには忘れられやすい。一部の人を除いては一般的に日常あまり必要としない学問だ。公式や定理などちょっと間をあけると直ぐに忘れる。

今年退職した夫が傍らでくつろいでいるのでちょっと質問してみる。

家族五人の生活を一人で支え続けた公務員だった。私と違い、ちゃんと立派に高校も卒業している。さて、今年の数学第一問目だ。

「お父さん、『3 - 5』は？」

「あほやなアおまえ、3から5は引かれへんやろが！」

「.....だよね。」

所詮、数学とはこんなものなのだ。

今、本棚には高等数学、数学、数学Aがねむっている。

「老後の楽しみに...」と、子供が置いていってくれたのだ。

私にとっては未知の世界だ。

時々手にとってパラパラと見たりするがなかなか手強そうだ。しかし、NHK 教育 TV の『高校講座 数学』などを見ながら進むと「ほう、ほう...」とわかりやすい。

これからは続々と団塊の世代がリタイヤしてくる。シニア対象の『数学講座』があってもいいのではないか。

「自分の脳もまだまだ捨てたものではない」と再確認もできるし、『学ぶ喜び』『わかる楽しさ』を今再び味わえるのだ。

それに孫に数学を教えられるじいさん、ばあさん...。最高にクールだ！

「楽しい数学」の普及に力を注ぐことが急務だ。結果、数学好きの子供が増え学力向上にも繋がっていく。世界に誇る理数学大国も夢ではない。やがては、優れた数学者や物理学者がどんどん輩出されるだろう。

日本の子供達の学力向上がお望みなら裾野を広げるべきだ。

老いの中にも若きの中にも人材はいたるところにころがっている。

(うえむら のぶこ)